

国際会議の国内側主催者へのヒアリング

1. ヒアリング対象：日本血栓止血学会 理事長、国際血栓止血学会大会長

早稲田大学理工学術院 先進理工学部 生命医科学科・生命医科学専攻 池田 康夫 教授

第23回 国際血栓止血学会 (ISTH Congress 2011) を2011年7月 京都にて開催。震災後にもかかわらず、開催を決定。約80カ国、海外から4000名の参加があり、国内2000名を含め、計6000名が参加した。IAPCO Awardを受賞。

(1) 国際会議の誘致・開催について

- 国際会議を誘致するには、まず国際学会でのプレゼンスが大事。学会において、国際的に日本の顔となる信頼できる人間がいないといけない。
- 宿泊・会場・アクセシビリティ、の3点が重視される。十分な大きさの会場があり、その徒歩圏に宿泊施設が複数なくてはならない。
- コストは主催側の問題なので、国際本部はそれほど気にしない。高いかどうかということよりも、トータルで黒字になればよい。
- 治安も大事。政情が不安定だったり、治安を理由に候補から外されるケースも少なくない。
- (若い研究者があまり海外に目を向けない傾向にあるという点について) 将来への不安があるのだと思う。海外に行くと、そこで学ぶものはあるが、帰ってきてから自分のポストがある保証はない。本当は、会議を誘致しようと思うのであれば、若手研究者が海外にいることは非常に大事。弟子がそれぞれの国でロビー活動をおこなって、誘致へ導くことができる。
- (ご自身の関与されている内科学会の開催地選定方針について) 内科学会のミッションは、地方における内科学の振興、であることから、発展途上の国で開催する方向。つまり、国際会議の開催は、開催地の研究・学術の振興に貢献するという考え。開催されれば、最先端の知識・経験をもったキーノートスピーカーや研究者が開催地へ来る。彼らとのネットワーキングは、地元の研究者にとって貴重な機会であり刺激になる。
- 国内の学会全体のことを考えれば、日本で国際会議を開催することは十分に意味がある。会議を誘致する目的は何か、をしっかりと認識すること。

(2) 国際会議開催地としての国・都市についての意見・要望

- 京都の会議場は、大きさの問題こそあるが雰囲気がいよい。京都に大型の会議場が絶対に必要。やはり海外の人は、文化を含めてその国を知りたい、という気持ちがある。京都のブランドイメージは強い。
- 大型の会議のみならず、小さい会議を開催することも大事。100名～200名規模の会議を開催していき、その積み重ねがあって大型の会議を誘致できるのだと思う。
- (テクニカルビジットについて) 学会の分野に限らず、日本の最先端の技術を見たい、知りたい、というニーズはある。ユニークベニューについては、ISTHの京都開催時も高台寺でレセプションを行い大変好評だった。京都にはそのような場所には事欠かないのも大きな魅力。

○ 国際本部で理事になる、国際的ネットワークを築くというのは、今日・明日にできることではない。推薦を受けた候補者が複数名あがり、そのうちの1名が理事に選ばれる仕組みで、容易ではない。日本もそのような人材が減ってきているし、そのような人を育てようという仕組みもない。国は、もっと人材を育成するという発想を持つべきでは。

* * *

2. UIA2011 東京大会日本組織委員会事務局(当時)

著名な建築家や技術者、研究者、学生など、通常約1万人が、世界中から集まるUIA(国際建築家連合)大会は、建築における世界最大級のイベント。3度目の立候補により、2005年に東京での誘致が決定した。日本初開催となるUIA2011 東京大会(第24回世界建築会議)を2011年9月25日～10月1日、東京国際フォーラムで開催。震災後ではあったが、世界110の国・地域から、5100名の参加登録(海外から1900名)。開会式には、天皇・皇后両陛下のご臨席を賜った。

(1)国際会議の誘致・開催について

○ 国際会議の誘致、開催までに、20年ほどかかっている。期間・資金・そして在外公館をはじめとする外部支援の3点が、この誘致・開催活動に耐えられないといけない。数千万円用意していた資金は誘致だけで使い果たしてしまった。

○ ロビー活動中は、在外公館、JNTOにはとても世話になったし、TCVBもがんばってくれた。1999年の北京、2002年のベルリンではいずれも大使公邸でレセプションを実施してもらったし、JNTOのスタッフが欧州(ベルリン大会)へ出張できてくれ、我々と共にロビー活動をしてくれた。

○ 開催地が決定する直前に釜山が立候補。我々の対抗馬として釜山だけを意識するようになってしまったのが敗因と思っている。他にトリノ、セビリヤも立候補しており、結果、トリノに決まってしまった。敵が誰かということ、釜山を意識しすぎて見誤ってしまった。(票読みは重要)

○ 5年かけて、個々の会員、企業等に、寄付を依頼した。国際会議は、最後まで収入が確定しないにもかかわらず、準備の段階で様々な支出が発生するので、不安がある。

(2)国際会議開催地としての国・都市についての意見・要望

○ 建築というテーマと、会議規模から東京しかない。アクセスの良さ、そのネームバリューからいって東京は特別ではないか。建築の観点からは京都も魅力的だが、施設の規模が間に合わない。

○ 英語の問題は非常に大きい。ホテルのフロントの英語力。同時通訳者の数。5カ国語で会議を行うが、シンガポールから通訳を派遣したケースもあった。なぜシンガポールが人気かがわかる。

○ コンベンションでブランド力を高めるといえるが本当は逆ではないか。都市にブランド力があれば誘致で苦労はしない。

○ プロモーションビデオ等、ツールの質の向上、充実化を期待。フィレンツェのビデオなどはすばらしかった。

○ 誘致活動では、まず都市のイメージが重要。まず、モノ(都市そのもの。映像でも良い)であり、次にヒトである。その都市に行ったことのある人が多いほど良い。その良さを他の人に伝えてくれ

る。

○ 大型の会議ばかりおうのではなく、例えば小規模でも良いので、国連の会議を集中的に誘致する等で経験を積む必要があるのでは。タイやシンガポール、モーリシャスなども積極的に開催している。

○ 日本には、ウェブサイトの立ち上げや資金集め等、会議を開催するまでのプロセスを第三者的な立場からアドバイスしてくれるプロがいない。本当は、JNTOやTCVBのようなCBにお願いしたいが、資金も人も足りない様子。

3. 国際法曹協会(IBA)前会長、現 2014 年大会ホストコミティチエア

川村明弁護士 アンダーソン・毛利・友常法律事務所

2014 年に国際法曹協会(IBA)年次総会を開催。想定参加者数約 5000 名。国際法曹協会は、世界約 200 の弁護士会と 4 万 5 千人以上の弁護士が会員となる世界最大の法律家の団体。その活動及び発言が国際社会に与える影響は大きい。

(1)国際会議の誘致・開催について

○ 周囲から、東京で開催してはどうか、という声があがり誘致に動いた。日本という国、東京という都市の人気は高い。やはり、行ってみたい、という気持ちが強いらしい。

○ 日本の弁護士の間で、国際化への関心が高まっている。来年、東京で会議が開催されることが貢献していることは確か。日頃交流をもつことのできない南米やアフリカ等の弁護士の参加も見込める非常に貴重な機会。特に若手の弁護士には良い刺激になる。

○ 我々のような仕事を「プロフェッショナル・サービス」と呼んでいる。国際会議の開催は、「プロフェッショナル・サービス」を国際化する切り札となりうる。「プロフェッショナル・サービス」産業の育成に、非常に貢献するものだ。

(2)国際会議開催地としての国・都市についての意見・要望

○ 国際会議の誘致を「インヴェストメント」と捉えるべき。あらゆる国際会議である必要はないが、「質」の良い会議を誘致すれば、その参加者がもたらす経済波及効果は非常に大きく、十分に価値がある。近年、ドバイ、ダブリンで開催したが、いずれも、国・都市をあげて対応してくれた。

○ 国際会議の開催は、「キャリア・ディヴェロップメント」である。若い人材(弁護士)の将来への道を広げるもの。そういう観点で、取り組んでほしい。

○ (国際学会で活躍するような人材を増やすためのサポートとして期待されることは何か、という問いに対し)渡航費用が一部でも良いので負担できると良い。(自分は)国際ネットワークを築くための飛行機代やホテル代を惜しまなかったが、一部でも負担してもらえれば、がんばってネットワークを築こうとする人はたくさんいるのではないか。